

弥生時代に続く、古墳時代・奈良時代の生活跡や遺物は遺跡内では見つかっていません。平安時代の終わり頃(約800年前)になると、当時の川の跡から多くの土器などが出土しています。この頃になると船による海上交通が盛んになり、国内・外の多くの土器が門前遺跡に運ばれて来ました。

現在の西海市からは、「滑石」という軟らかい石を材料とした石鍋が、関西からは内側に模様の描かれた碗が運ばれています。また、中国から運ばれた陶磁器も多数出土していることから、門前遺跡の近くには交易の船が出入りする港があったと考えられています。



滑石製石鍋

※参考:「運輸館(第13章参照)」出土の石鍋



関西の土器

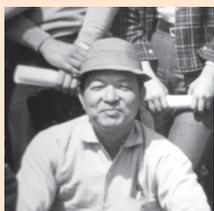
※写真提供:佐世保文化財調査事務所



中国の陶磁器(約800年前)

※写真提供:佐世保文化財調査事務所

コラム～考古学者 麻生 優～



麻生 優

※写真提供:麻生直子氏

麻生優(1931～2000:千葉大学名誉教授)は佐世保の考古学研究の父であり、日本の洞穴遺跡研究の第一人者である。1964年(昭和39)に岩下洞穴の発掘調査を行い、以来、下本山岩陰、泉福寺洞窟、菰田洞穴など多くの遺跡を発掘し、佐世保は言うに及ばず、日本の縄文文化発生期の様相の解明に大きく貢献した。

また、佐世保における洞穴遺跡の調査を通じて多くの考古学研究者を育てた。麻生が育てた研究者たちは、現在日本各地で考古学研究の牽引役として活躍を続けている。

古墳時代から後の相浦谷の様子

弥生時代は、やがて古墳時代へと移ります。この時代の遺物は相浦谷でも見つっていますが、生活の場所はまだ発見されていません。

さらに、その後の奈良時代や平安時代の大きな遺跡も、門前遺跡以外は発見されていませんが、相浦町の飯盛神社の境内からは経筒（経塚）が見つっています。経塚とは、仏教遺跡の一種で、平安時代の終わりに盛んに造られました。（第9章 広田 参照）

経塚を造るにはかなりのお金と労力が必要です。飯盛神社の経筒（経塚）は、平安時代の終わりに頃の相浦に相当の有力者がいたことを物語っているのです。やはり、相浦川下流の低地には弥生時代から続く開かれた土地があり、人々が暮らしていたことが分かります。



飯盛神社の経筒

佐世保市博物館島瀬美術センター所蔵

コラム～大宮姫神社の伝説～

平安時代のなかば頃に「しらしら別当武辺胤明」という人物が相浦の開拓に入り、しだいに相浦川沿いに上流に向かって開拓していったという。土地を開き海を埋めるにあたり、地の神を鎮めるために神社を建てた。それが大宮姫神社であり、978年（天元元）のこととされる。

しかし、江戸時代に平戸藩が領内の古い神社や寺の由来を調査した『田舎廻』によれば、船越に住む武辺喜左衛門

から7代前の先祖が大宮姫神社の神官武辺胤明という。調査された1795年（寛政7）から7代さかのぼると、江戸時代の始めか戦国時代の終わり頃の人ということになる。



大宮姫神社



大宮姫神社本殿

大宮姫神社はもともと愛宕町のあたりにあった大宮古社を、1585年（天正13）に宗家松浦氏の第16代宗金親が、現在の地に建て替えたもので、御神体の豊玉姫の木像や宗金親本人のものらしい烏帽子を被った男性座像など、その由来は相浦の歴史を物語っている。

しかし、神社創建の伝説については、『田舎廻』の記述もあることから、すこし慎重に受け止めなければならないだろう。

なお、現在の本殿は江戸時代始めの1679年（延宝7）に建て替えられており、長崎県下でも最古級の神社建築物として長崎県の文化財に指定されている。

武士が現れる

平安時代の終わり頃から、長崎県北部や佐賀県唐津地方には「松浦党」と呼ばれる武士集団が現れ、地域ごとに土地を支配していました。この地方は山が多く、平地といえれば複雑に入り組んだ入江の奥や、川沿いにしかありませんでした。そのため、武士たちは小さな勢力に分かれていました。

そして、その多くは貿易や海運などを行っていましたが、海賊行為を働くこともありました。これは「倭寇」と呼ばれ、朝鮮半島から中国まで進出して大変恐れられました。

この武士団「松浦党」の中心的存在だったのが宗家松浦氏です。松浦党の武士たちは、日本を二つに分ける源平合戦や南北朝の戦いにも参加していますが、必ずしも松浦党として団結したのではなく、それぞれに味方したり、裏切ったりしています。

7 嵯峨源氏の一族である源久が、1069年(延久元)に撰津渡辺荘(今の大阪府から兵庫県にまたがる地域)からこの地方の役人としてやってきたのが始まりといわれている。代々、名を一字とするのが伝統で、在地の武士たちも名家になって一字名を名乗るようになる。

宗家松浦氏が相浦に本拠地を移す

宗家松浦氏は第3代の清の頃(1200年頃)に、すでに相浦を領有していました。そのころの相浦には「相神浦氏」という武士がいたようで、1384年(永徳4)の古文書には「あいのうら鬼益丸代」や「あいのうらのはら能登守超」という武士の名が見られます。



新豊寺跡の石塔群

そして、時期は分かっていますが、宗家松浦氏は今福(松浦市)から相浦に本拠地を移します。宗家松浦氏の菩提寺だった新豊寺(下本山にあって、その後廃寺となる)に、13代の盛が1443年(嘉吉3)に大きな鐘を贈ったという記録があり、少なくともその頃には相浦が本拠地になっているようです。

←宗家松浦氏第13代盛の墓(東漸寺)

※市指定文化財

ところで、宗家松浦氏が相浦に移る前からいた相神浦氏ですが、いつの頃から佐賀県の多久に一族が移っています。今でも多久には相浦の姓を名乗る人たちが暮らしています。相神浦氏が多久に移ったことは、宗家松浦氏が本拠地を相浦に移したことと関係があるようですが、詳しいことはよく分かっていません。

宗家松浦氏、武辺城を築く

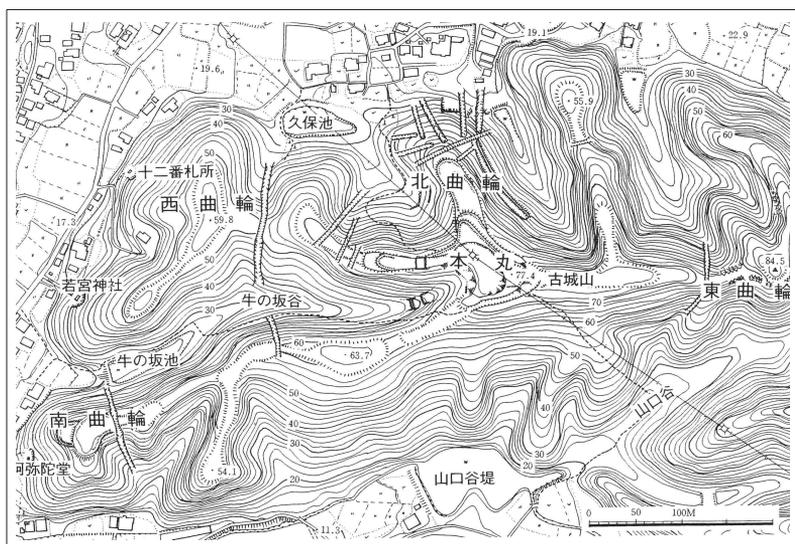
1467年(応仁元)に起こった^{おうえん}応仁の乱をきっかけに、室町幕府や朝廷の権威が落ちて、武士たちは幕府や朝廷の言うことを聞かなくなり、全国的に戦乱が巻き起こる戦国時代となりました。武士は武力で勢力を広げて領地を獲得する風潮から、それぞれ自衛のための城を築いていました。宗家松浦氏は本城として武辺城を築きました。



武辺城跡遠望(矢印のある場所が本丸)

武辺城は竹辺町の標高70メートルの丘の上にあります。将冠岳から伸びてきた丘陵の先端部にあり、中心部に置かれた本丸と、本丸を守る3つの出郭で構成されています。城の範囲は南北500メートル、東西800メートルにも及び、長崎県北部地域で最大級の規模を誇ります。

8 幕府重臣同士と将軍の跡継ぎ問題が絡んで起こった大乱。京都を中心に11年続いた。



武辺城縄張り図

1995、96年(平成7、8)に行なわれた発掘調査では、本丸から大小7棟の建物跡が発見されました。そのうち最大の3号建物は南北6メートル、東西10メートルの規模があり、これが主殿と考えられます。恐らく、13代盛や14代定がここで政治や外交など、当主としての仕事をしていたのでしょう。



武辺城の建物跡



武辺城跡出土品

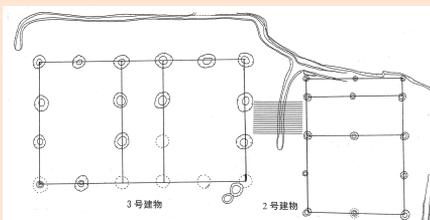
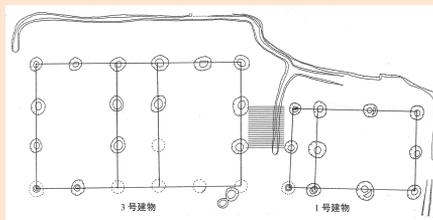
本丸からは国産の陶器に加え、中国や朝鮮半島の陶磁器が多数出土しました。また、抹茶を挽く茶臼も出土しています。高価な外国産の陶磁器を持ち、茶の湯もたしなんでいるのは、宗家松浦氏ならではの生活の姿ではないでしょうか。

コラム～盛は一人になりたかった～

武辺城の本丸には、主殿をはじめとする7棟の建物が建っていたが、そのうちの1号建物だけが建て替えられている。同じ場所で、つまり主殿に向いた面を、北側に90度振って2号建物に建て替わっている。

主殿(3号建物)が公の場所だとすると、その脇にある1号建物は盛の個人用の家だった可能性もある。外交や政治などの緊張する仕事の後、くつろげる家の縁側が表にあっては足も延ばせないため、縁側が建物の裏側になるように建て替えたと考えられる。

家を建て直すというわがままが言えるのは、主人の盛だけだろう。従って建て替わる前の1号建物と建て替え後の2号建物が、盛の私的な家だったと考えられる。



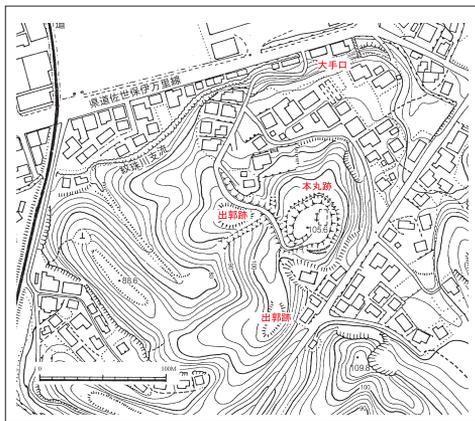
建て替え前の1号建物(左)と建て替え後の2号建物(右)

※アミかけ部分は渡り廊下推定位置

大智庵城の落城

宗家松浦氏は15代政のときに本城を武辺城から大智庵城(瀬戸越2丁目)に移したといわれています。そして、1498年(明応7)に平戸松浦氏の夜襲にあい、落城しています。城主の政は戦死してしまい、宗家松浦氏は相浦谷の領地を失いました。

平戸松浦氏は、もともと鎌倉時代の始め頃に宗家松浦氏から分家した家柄で、田平や平戸を領有していました。平戸松浦氏は中国陶磁器の交易などで力を付け、しまいには本家をを超えるまでに成長したのです。



大智庵城縄張り図

大智庵城は丘の上に本丸と、その周りに空堀を持つだけの城で、武辺城に比べると大変規模が小さくなっています。そのため、なぜ城を移したのか疑問が残るところですが、事実、宗家松浦氏の第15代政はここで戦死しています。

武辺城から出土した焼き物のうち、15世紀後半のものは火を受けたものが目立ちました。このことから、大智庵城の落城と同時に武辺城も攻撃を受けて廃絶したものと考えられます。



大智庵城跡遠望

宗家松浦氏が相浦に戻る

大智庵城が落城した時、政の子で、後に第16代となる幸松丸は、わずか1歳で母親とともに、平戸方に捕らえられてしまいました。しかし、宗家松浦氏の家臣たちによって救い出され、西有田(現在の西松浦郡有田町)の唐船城で成長し、宗家松浦氏の第16代親となりました。

この頃の弱小武士は、大きな勢力をもつ大名と同盟を結んで後ろ楯としていました。宗家松浦氏は太宰府の少貳氏に働きかけ、少貳資元の仲介で1531年(享祿4)に相浦に戻ることができました。大智庵城の落城から33年ぶりのことでした。



唐船城跡遠望

そして勢力をもつ大名を後ろ楯とするために、その大名の子を養子に迎えています。相浦回復のときには少弐資元の子の五郎鎮を、その後小弐氏が勢力を落とすと島原の有馬氏から五郎盛(左高)を迎えます。

飯盛城の戦い

相浦に戻った宗家松浦氏は、居城として飯盛城を築きました。しかし、平和な時はわずかしか続きませんでした。1542年(天文11)と1563年(永禄6)の2度にわたって、平戸松浦氏が攻めてきたのです。

戦いは宗家松浦氏の不利に展開しました。そして、佐世保城主の遠藤但馬守が仲介して停戦となり、平戸から松浦隆信の次男である九郎親を養子に迎えることで決着しました。



飯盛山(飯盛城があったとされる山)

戦った相手の子を負けた側が跡取りにすることは、屈伏したことを意味します。平戸から九郎親を養子に迎えたことで、宗家松浦氏は平戸松浦氏の支配下に入るようになったのです。

コラム～飯盛城と鉄砲～

日本に鉄砲が伝来したのは1543年(天文12)のことで、種子島に漂着したポルトガル人が伝えたといわれている。ところが、最近の研究によると鉄砲を伝えたのはポルトガル人ではなく、彼らを連れてきた中国の海賊、王直だったらしい。その王直は、一説によると1541年(天文10)に既に平戸に来ていたともいわれている。そして、平戸松浦氏の歴史書『印山記』には、飯盛城攻めで鉄砲を使ったという記録がある。ひょっとすると、1542年(天文11)の時点で既に平戸松浦氏は鉄砲を所有しており、第1次飯盛城攻めに使用したのではないだろうか。そうであれば、日本で初めて鉄砲が使われた戦いは、飯盛城で行なわれたのかもしれない。

ちなみに飯盛城の場所は、実はまだ分かっていない。相浦川が自然の水堀に利用されたと考えられ、わずかに伝える当時の様子から、現在の飯盛神社がある丘一帯とも考えられる。

相当原の合戦

平戸から九郎親を跡取りとして迎える前に、宗家松浦氏は太宰府の少弐氏と、島原の有馬氏からも養子を入れていました。とりあえず少弐氏の子、五郎鎮は菰田に住ませ、有馬の子、五郎盛(左高)は西有田の唐船城に住ませました。



相当原古戦場

宗家松浦氏の跡取りを約束されながら、平戸の九郎親が第17代となることが不満だった五郎盛(左高)は、相浦の飯盛城を攻める計画を立てます。

戦いは、1572年(元亀3)に柚木の相当原で行われました。結果、宗家・平戸の連合軍が勝利して、五郎盛(左高)は西有田に逃げて行きました。義理とはいえ、親と子の戦いだったのです。

その後の宗家松浦氏

相当原の合戦後も、宗家松浦氏は平戸松浦氏の支配下にあつて、相浦の飯盛城を居城にしていました。そして戦国時代を生き抜き、ようやく平和な時代となった江戸時代初めの1615年(元和元)に、江戸幕府が出した「一国一城令」(大名の持ち城を1つに制限する命令)で飯盛城は壊されたと考えられます。そして宗家松浦氏は今福に移り、相浦を去りました。

昔ばなし～オサエ観音～

佐世保市の東にある西ノ岳に、オサエ観音という小さなお堂があります。ここは、安産の神様として知られていますが、このオサエ観音には相当原の合戦にまつわる悲しい物語が伝わっています。

平戸から宗家松浦氏の養子として九郎親が迎えられたことで、有田の唐船城に追いやられてしまった五郎盛(左高)は、養父の宗金親と九郎親を恨み、飯盛城を攻める計画を練っていました。このことを知った宗家松浦氏の舌くからの家臣山本右京は、5歳の子と身重の妻オサエを連れ、雪のなか西ノ岳を越えて相浦に知らせに走ります。



オサエ観音堂

峠を過ぎてオサエは転んだ拍子に産気づき、助けられた木こりの家で子を産みました。この間に右京は相浦まで急ぎ、五郎盛(左高)の謀反を知らせた後、急いで西ノ岳に引き返しましたが、オサエは産後の出血が止まらず帰らぬ人となっていました。

山本右京の知らせにより準備を整えることが出来た相浦・平戸の連合軍は、柚木相当原で五郎盛(左高)の軍勢を迎え撃ち、勝利することが出来ました。

その後、オサエの死をふびんに思った人々は、オサエのために小さな祠を建てて供養するようになったのです。

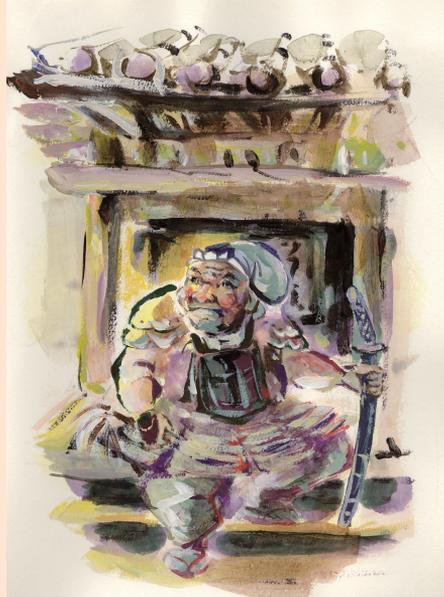
コラム～苦勞人の宗金親～

宗家松浦氏の第16代当主である宗金親は大変苦勞している。

まず、わずか1歳のとき大智庵城で父親を失い、母親とともに平戸方に捕えられてしまった。幸いにも救い出されて唐船城で成人する。

宗金親は太宰府の少貳氏に働きかけ、室町幕府の使者を平戸に送って相浦を回復することに成功し、飯盛城を築いて移り住んだ。その見返りとして、少貳氏の子を養子に迎える。宗金親が38歳のときである。

その後、少貳氏の力が衰えると、今度は島原の有馬氏の子を養子に迎え、その後ろ楯に平戸松浦氏と対抗する。この間、2度に渡って平戸方は飯盛城を攻めた。



宗家松浦氏第16代当主 宗金親

イラスト：大石 博

今度は、相浦谷の南の佐世保、早岐地方を領する武雄の後藤氏が平戸方と同盟を結んだことで完全に包囲された形になり、ついに平戸松浦氏の子を養子に迎えて屈伏してしまう。家が滅ぶことはなくなったが、もはや平戸松浦氏の支配下に甘んじなければならなくなったのである。宗金親66歳のときである。

ところが、第17代となる平戸の松浦隆信の子、九郎親は家臣との刺し違え事件で死亡、その子の定はまだ4歳であった。今度は、宗家松浦の跡取りである孫の無事成長を心配しなければならなくなったのである。宗金親は77歳になっていた。



宗金親の墓（竹林寺跡：新田町）

そこで、死亡した17代九郎親を供養するために心月寺を建て、孫18代定の無事成長を願って大宮姫神社を現地に遷宮した。宗金親79歳のときである。

宗金親は1577年（天正5）に80歳で没した。その生涯は、宗家松浦氏の再興のための苦勞の連続であった。孫の18代定の行くすえを願いながら逝くも、定はその後の朝鮮出兵で戦死している。（年齢は推定である。）

江戸時代の相浦谷

江戸時代には、中里一帯が相浦谷を治めるの中心地となっていました。そのため、藩の役所である「⁹相神浦筋郡代役所」が中里に置かれ、年貢の取り立てや裁判などを行っていました。そして、山口村（現在の相浦）、新田村、中里村、皆瀬村、大野村、柚木村、里美村の村々には庄屋がいて、村を取り仕切っていました。

9 相浦の古い地名は、「相神浦」と書き「あいのうら」とも、「あいこうのうら」とも呼ばれていた。15世紀の室町時代から現れ、江戸末まで使われる。しかし、当時であっても相浦と書く場合もある。



半坂(八ノ久保町)

また、平戸往還（街道）が相浦川に沿って通っていました。田平を出発して江迎、佐々を抜けた平戸往還は、半坂（八ノ久保町）を越えて中里に入ります。中里には宿場が置かれていて、本陣（殿様の宿）もここにありました。中里を抜けた往還は相浦川を上り、大野地区の左右宿を経て、堺木から佐世保宿（今の元町付近）へ向かいました。

江戸時代の初めには、山間部の開拓も盛んだったようです。柚木地区の筒井町には、その頃に荒地を切り開き、田畑に変えた手光一族の墓地があります。すでに、相浦川の低地から中流域の川沿いの低い場所は開発し尽くされていたため、山間部を開墾して土地を求めたのです。

斜面を造成して棚田に変え、水を引いて田とした当時の人の苦労ははかりしれません。

また、矢峰地区の淀姫神社には豊作を祈って、前年に収穫された稲藁で神社の大注連縄を作り替える「ヤモード祭り」が伝わっています。この行事は冬の間、山に帰っていた田の神様を、田植え前に里に迎えるために行われるお祭りで、「ヤモード」とは「山人（やまうど）」が詭ったものと考えられています。祭りを司るのは「ヤモード」と呼ばれる青年2名で、鳥居の上にはヤモードだけが上ることを許されています。

毎年1月26日に、矢峰、松原両町から人々が集まって行われていて、江戸時代の風習を現代に伝える行事として、長崎県の無形民俗文化財に指定されています。



ヤモード祭り